



## 札幌市における婦人服の色彩統計

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道学芸大学 公開日: 2012-11-07 キーワード: 作成者: 伊藤, 花子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00000755">https://doi.org/10.32150/00000755</a>

## 札幌市における婦人服の色彩統計

伊 藤 花 子

北海道学芸大学札幌分校家庭科研究室

Hanako, Iro : Statistics in colour seen in women's  
dress in Sapporo City.

This is the investigation of the variety in colour between 1956 and 1959.

The colour of dress is freely chosen according to the taste of individuals, and in the local investigations there are features characteristic of respective circumstances. We notice a special tendency in Sapporo City.

In this study attention was paid upon the colours generally prevailed, but in future a study in connection with current fashion is to be developed into.

### I 緒 言

衣服の色は、個人の好みによつて自由に選択されるものであるが、各地方ごとに調査すると、それぞれの立地条件にもとづいた、地域的特徴がみられることが報告されている。

本研究は札幌市における婦人衣服の色彩の傾向を探ることを目的として、昭和31年から34年までの4年間にわたつて行なつたものである。調査は年齢・職業などの条件にかかわらず、街頭にあらわれた婦人衣服の色彩を対象としたもので、とくに一般に用いられている色彩の基調を、明らかにすることを主眼とした。

この研究に當つて貴重な助言をいただいた奈良女子大学家政学部、色彩研究室の山崎勝弘教授に、心からの謝意を表する次第である。

### II 調査方法

#### (1) 観測地点

観測地点には、交通量もつとも多く、しかも各階層の女子の通行する地点として、札幌市の中心地である四丁目十字街附近にある時事放声社2階の、三越の方に向いた北側の窓を選んだ。ここの交通量は1日平均3万人である。観測点からの通行者の見通しは約50メートルで、北から南に向つて歩行する女子について観察した。

#### (2) 方 法

調査には比較法を用いた。これは基準となる多くの色票を用意し、記録すべき色と等色の色票を手早く探し、その3属性を記録する方法である。

#### (3) 資 料

日本色彩研究所による「色の標準」を統計用に改組した色彩統計盤を用いた。これは東京・大阪・神戸の色彩グループの使用したものと同一のものである。色票には各々の色相・明度・彩度

の記号がついている。

#### (4) 対象

女子服装全般にわたる色彩を調査したが、この報告では婦人洋装のみに限った。また制服の女学生およびデパート・官庁・会社等の事務服を着た事務員は除外した。

調査人数は下記の通りである。

年度 \ 季節	春	夏	秋	冬
昭和31年	1,300	1,400	1,700	1,500
昭和32年	1,000		1,200	1,200
昭和33年	1,200	1,000	1,400	800
昭和34年	1,300	800	1,300	1,200

### Ⅲ 調査結果

#### (1) 季節別の傾向

##### (a) 無彩色と有彩色

衣服の色は季節的影響を強くうけるもので、四季の変化に富むわが国はとくにその傾向がいちじるしい。

札幌市の場合もこのことが調査の結果に明らかに表われている。第1表は、4年間にわたる無

第1表：無彩色と有彩色の出現率

		無 彩 色				有 彩 色
		白	黒	灰	合 計	
春	昭和31年	2.5	5.8	5.7	14.0	86.0
	“ 32年	2.9	9.5	7.0	19.4	66.6
	“ 33年	—	9.8	10.4	20.2	79.8
	“ 34年	12.1	7.5	8.4	28.0	72.0
夏	“ 31年	41.7	6.5	1.5	49.7	50.3
	“ 32年	—	—	—	—	—
	“ 33年	40.0	1.9	2.4	44.3	55.7
	“ 34年	62.8	0.5	3.1	66.4	33.6
秋	“ 31年	—	8.5	1.0	9.5	90.5
	“ 32年	1.8	14.4	10.0	26.2	73.8
	“ 33年	4.2	7.5	11.0	22.7	77.3
	“ 34年	6.2	14.4	15.4	36.0	64.0
冬	“ 31年	1.2	16.5	6.8	24.5	75.5
	“ 32年	5	12.5	5.1	22.6	77.4
	“ 33年	0.5	8.1	5.8	14.4	85.6
	“ 34年	0.3	7.9	11.8	20.0	80.0

彩色と有彩色の出現率である。

夏は無彩色が多く、例年50%程度の出現率を示し、とくに34年度は66.4%の高率を示した。これは夏は白の使用率が高いため、34年のごときは白の使用率が62.8%に及んでいる。

なお黒は一般に秋と冬が高率であるが、その出現率は白に比べて年毎の変動が大きい。

すなわち昭和34年の夏は6.5%であつたのが、31年度はわずかに0.5%に過ぎなかつた。それ

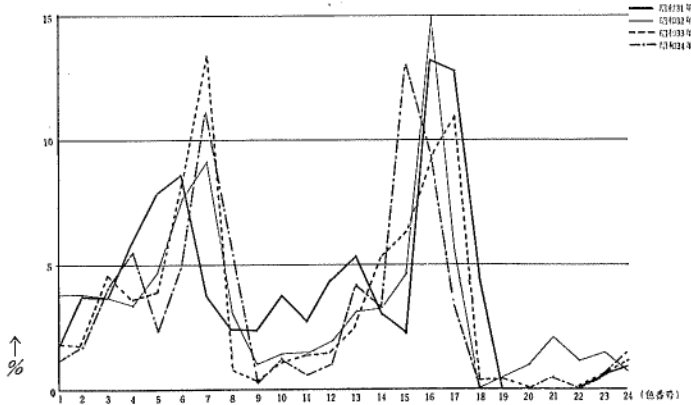
札幌市における婦人服の色彩統計

に対し灰は年毎に出現率が高くなっている。

(b) 色 相

つぎに色相についてみると、春の統計では昭和31年、32年は青が最高であるが、33年は黄橙、34年はみどりみあおが最高である。(第1図)

第1図：色 相 (春)

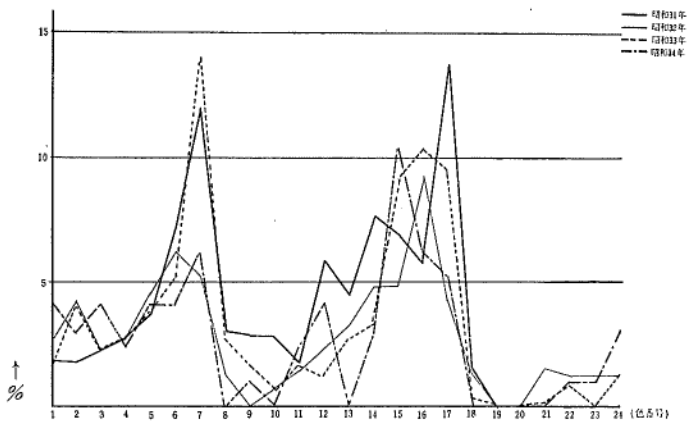


色相番号は日本色彩研究所用、色名はつぎの通りである。

- |    |     |     |    |     |     |     |    |     |     |     |    |     |     |     |    |     |     |     |    |    |     |     |     |
|----|-----|-----|----|-----|-----|-----|----|-----|-----|-----|----|-----|-----|-----|----|-----|-----|-----|----|----|-----|-----|-----|
| 1  | 2   | 3   | 4  | 5   | 6   | 7   | 8  | 9   | 10  | 11  | 12 | 13  | 14  | 15  | 16 | 17  | 18  | 19  | 20 | 21 | 22  | 23  | 24  |
| R. | YR. | rO. | O. | YO. | YO. | rY. | Y. | gY. | YG. | YG. | G. | bG. | BG. | gB. | B. | PB. | BP. | bP. | P. | P. | rP. | RP. | PR. |
| 赤  | 橙   | 黄橙  | 黄  | 黄緑  | 黄   | 黄緑  | 緑  | 青緑  | 青   | 青   | 青  | 青   | 青   | 青   | 青  | 青   | 青   | 青   | 青  | 青  | 青   | 青   | 青   |

秋はやはり青系統が高率であるが、33年は黄系統の方が多く、34年度は春の場合と同じくみどりみあおが最高を示している。紫は出現率が少ない。24色相中多く用いられるものはだいたい定っており、青系統、橙系統(茶含む)が各年度を通じて高い出現数を示し、つぎに赤・黄・緑などが多く用いられ、もつとも低いのは紫系統である。(第2図)

第2図：色 相 (秋)



なお青系統の中で実際に多く用いられる色は、その年により変化しており、昭和31年頃はネビュールブルー、ウルトラマリンなどむらさきみあおの系統が好まれ、32年、33年にはあいやコバルトなど純粋の青系の色が多く用いられている。又34年はみどりみあお系統のセルリアンブルー、く

じやくあおなどが好まれるようになった。

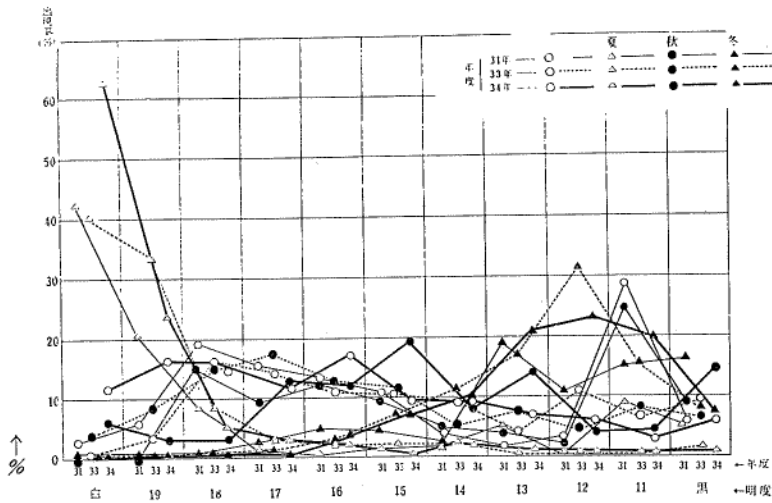
夏と冬についても使用される3色相の傾向は、春秋と大差はない。

(c) 明 度

明度の場合、夏は他の季節に比べ高明度のものが多く使用され、白の多いことはすでにのべたが、19・18などは高率である。

春、秋は大体似ているが、春の場合は17~19が多く、秋は15~17に大きな山がみられる。冬は低明度の割合が高く、以上の高明度はずつと減少している。(第3図)

第3図：4年間における四季の明度図



なお年度別観察の結果によると、31年度は春・秋とも11などの低明度の使用率が高いが、32年以後は明るい方に移行している点が目立っている。

(d) 彩 度

四季を通じて彩度の低い方が多く用いられ9以上の使用率は非常に少ない。高彩度の場合には明度の関係もあるが、一般に目立つ色合が多い。また衣服の種類によつては高彩度のものが比較的多く使用される場合もあるが、全体としてはその出現率は低い。

なお年度別にみれば昭和32年、33年度には最高彩度の出現もみられたが、34年度には減少している。(第4図)

(2) 服種による色彩の傾向

衣服の色は、種類に応じてそれぞれの傾向を示すものである。この調査によつてはつぎのような結果がえられた。なおここでは調査の全体を示すことを省略して、代表的なものについてのみグラフを用いて示すことにした。

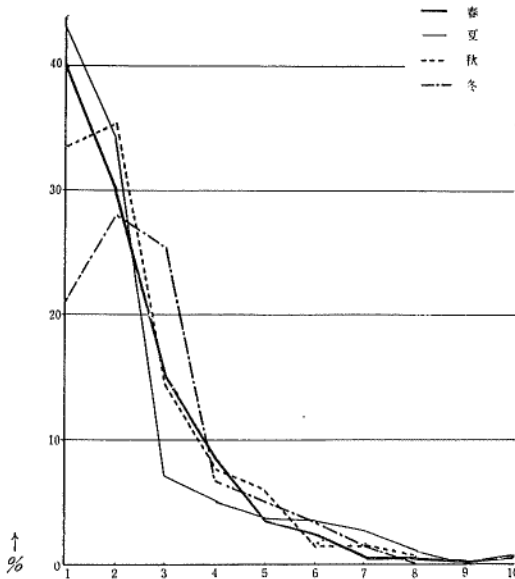
a 単色の衣服

これは衣服の色が一色で構成されている場合をいい、オーバーやワンピース、上下対のツーピース類などがこの分野に含まれる。

○オーバー

北海道では最も着用期間の長い衣服で、色相では青系統と橙系統が他を圧して多い。明度彩度とも低い方が高率で、中等以上の高いものの使用率は極端に減少している。すなわち紺やグレー

第4図：4季における彩度図（昭和33年度）



・茶・チョコレート、青緑などの濃色の使用率が高い。（第5図）

○スプリングコート

色相では昭和31年を除くと、黄橙が最高で、次が青系統になつている。スプリングコートの特徴は明度上にあられており、16~19などの高明度が多い。

彩度は1~2など低い方が多く、5以上は僅少、9・10などは皆無といえる。

うす茶・明るいオリーブ灰、うすピンクスカイグレーなど明るく沈んだ色が多い。（第6図）

○レーンコート

色相では赤系統と青系統が多く、高明度の使用率が高いが、又低い方もかなり用いられている。彩度は低い方に片寄っている。

レーンコートは他のコート類に比べ、使用される色類が非常に多い点の特徴である。比較的多く使用される色はうす黄茶、クリーム・灰味青・パールピンクなどである。昭和31年には紺・グレーなどが圧倒的多数をしめていたのが、年毎に高明度の使用数がふえ、色どり豊かなものが多く用いられるようになった。（第7図）

○ワンピース

青系統が群を抜いて多く、橙系統、赤系統なども高率を示している。明度には一定の傾向がみられず、高低種々のものが使われており、他の衣服と異つた現象があらわれている。彩度は低い方が多く、緑青・パールピンク・うす茶などが多く用いられている。（第8図）

○ツーピース

色相では青系統が高率であるが、昭和32年度は黄橙が高率である。

明度は13~18までが多い。また従来毎年黒がかなり高率であつたのが、34年度は減少しているが目立っている。

彩度は最低の11が多く、14以上は少ない。すなわち昭和31年には紺やグレーなどが多く用いられたが、32年以後は明るく彩色の低い色の使用率が高くなり、白茶・黄味白・ページユ・青味灰などが用いられている。（第9図）

○総括

単色の場合の特徴は明度にもつとも強くあらわれており、オーバーは低明度でスプリングコート・ツーピース・ワンピースなどは明るい色が多く用いられている。またレーンコートはコート類の中でいちばん色どりが豊かである。

単色の衣服は一般に着用年数が長いため、刺激的でなく落ち着いた感じの色を用いる傾向があり、その結果低彩度のものの使用率が高いといえよう。

b 複色の衣服

上下分離した衣服のことで、ブラウスやジャケット、またスカート、スラックスなどが含まれ

る。服種に基いて吟味すると、つぎのような結果があらわれる。

○ジャケット

色相は赤系統・橙系統・青系統が高率で、明度が広範囲に用いられているところに特徴がある。彩度は他衣服に比べると中等程度もかなり用いられていて、全く低彩度に傾くという傾向はみられない。しかもその傾向は年ごとに強くなっている。すなわちジャケットには赤・黄・ブルーなどの鮮明な色も他衣服に比べれば多く用いられている。(第10図)

○セーター

セーター類は季節の影響を強く受ける衣服で、特に明度との関係が指摘できる。春は白が30%以上しめており、明度 17~19 などが高率である点が目立っている。総体的に中・高明度が多く使用され、無彩色も他衣服に比べると使用率が高い。空色・うすいピンク・レモンイエローなどが多く用いられている。(第11図)

○ハーフコート

北海道では割合多く用いられる衣服で、夏を除いた各季節に用いられており、色の用い方も、季節に応じて多少の変化がみられるのは当然である。一般的傾向として色相では紫系統・黄緑系統の使用率が極端に少ない点が目立っている。

明度は13から16までの中等程度が多く使用されており、高明度の割合も多い。

彩度も 12, 13 などが最高であるが、17までかなり幅広く用いられ、緑青・黄茶などが割合多い。(第12図)

ハーフコートは上半身を被う性能上、他衣服より赤系統が多く、色彩が明るく、鮮やかなものが多く用いられている。

○ブラウス

色相は青・橙系統が多く用いられており、明度は19が最高率をしめているが、彩色は低い。ごくうすいピンクやレモンイエロー・うすい空色などが多く、性能的に夏の上衣であり、スーツなどの下着として用いられているため、他衣服の色に対し配色範囲の広いもの、涼しい感じの色相が多く用いられるのは当然である。(第13図)

○スカート

スカートは無彩色が圧倒的に多く、大体50%程度の割合を示しており、黒が最高率を示している。色相中青系統が最高なのは紺及び藍などが多く、他衣服に比べ赤紫が多いのも目立っている。明度は 11~19 まで割合多彩に用いられている。彩度は中以下が多く、中以上は皆無である。(第14図)

○ストラックス

スカートより更に黒の使用率は高く、着用者の半数は黒を用いている。又使用される色の種類は非常に少なく、色相は青・黄橙に限られ明・彩度も 1~4 のみで5以上はグラフ上にあらわれていない。(第15図)

○総括

この場合、上衣と下衣では色の用い方に大きなちがいがあり、それらは着装上の特徴に基いているといえよう。

上衣は顔に接近して用いられること、また比較的購入しやすい条件を備えていることなどから、個人的所有数が多い。従つて明るく派手な感じの色もかなり多く用いられている。下衣は上衣に比べて所有数が少く、多くの上衣に対して配色しやすい色が選ばれる傾向がある。また下部の安

定した衣服構成が無難であるため、黒が圧倒的に多く用いられ、その他グレーや紺・茶などが高率を示すことになる。

### (3) 配色の傾向

#### ○上下の配色について

衣服の配色については多くの面から検討できるが、ここでは上衣と下衣について色差の関係をとりあげてみた。

色相差(第16図～第18図)は対立の場合の調和が最も多く、次は同色と、第二不調和範囲に含まれる5が高い割合を示している。色相の関係は明・彩度によつて調和を保持できるから、このような結果が生じたものと考えられる。

明度の場合は、スカートに対して上衣の方が明るく、その差は2～7が多く、特に7は最高である。スカートの方が上衣より明るい場合は、一体に低率で多くの者は下衣を暗くし、上衣の方を明るくして着装していることがわかる。彩度は上下同彩度の場合がもつとも多く、次は下衣が1だけ高いものが多い。大体スカートやスラックスは50%以上は無彩色でしめられており、中でも黒の使用率の高い点は前述の通りである。また上衣の明度がいちぢるしく高いことも特徴で、その傾向は季節の暖いとき程顕著である。

### (4) 類被服の色彩

ハンドバッグや靴・帽子など類被服の場合は、着用している衣服の色と関連して用いられ、また流行の影響も受けやすいものであるが、統計の結果は次のようになる。

#### ○靴

種類は冬季用防寒靴と、それ以外の革靴の両方を対象とした。ただし革靴の場合は、白が常用される夏を除外した。

防寒靴は無彩色が55%で、黒・白の割合は半々程度である。色相は青緑が群を抜いて多い。明度は13～16までの中間が多く、特に15は1番高率である。彩度は2が多い。革靴の場合は黒が42%白が19%で、グレーを含めると無彩色は63%におよぶ。

色相は橙・赤・緑・青の系統のみで、他はグラフ上に見られない。

明度は高い方が多く、有彩色で明度の低いものはほとんど現われていない。

彩度は3が最も多い。すなわち靴の場合は衣服類に比べ、色合の明瞭なものが多く使用されている。(第19図、第20図)

#### ○ハンドバッグ

黒が70%をしめており、全被服中最も黒の使用率は高い。

色相は赤・黄橙・青がほとんど同率であらわれているほか、緑が少々みられる程度で、他は皆無の状態である。

明度は16～19の高明度が多く、彩度は12、13など低い方が高率で、16以上はずつと少なくなっている。

明るい茶・にぶ茶・ピンク・緑などが比較的多い。以上は春の調査の結果であるが、夏には白の多いことは当然である。(第21図)

#### ○帽子

昭和34年春の調査では、札幌市における帽子利用者は17%程度で、かなり少ない。しかし冬は防寒上利用者が多く、以下は冬季用の分を提出することにした。

色相では黄橙が最高で、赤・黄緑の順になつている。他の類被服に比べると色相の種類が多く、

紫以外は全部用いられている。

明度は 11 から 18 までほとんど全般にわたって使用されており、彩度は最高 10 が図上にあらわれている。

すなわち帽子は黒・紺などのような目立たない色が用いられる反面、真赤・緑などの群かな色、又グレー・青緑・うす茶などのような渋みのあるものなど、多くの種類が用いられている。(第 22 図)

#### ○総 括

類被服の場合は、それぞれの用途上の目的が色彩の用い方に大きな影響を与えていることがわかる。

総体的には無彩色、特に黒の使用率が非常に高率である点が目立っている。

類被服は個人的所有数が、衣服類に比べて少なく、従って選択の際は、数少ないものをどの衣服に対しても、配色よく用いるよう考慮しなければならず、また分量は小さいが服装上ポイント的役割を果たしており、全体を統一する上から効果が大きい性格をもっている。そうしたことから黒をはじめとする無彩色は、それらの要求にほぼ合致し、また飽きのこない点が無難といえよう。

なおそれらの中で、帽子が特別多彩であるのは、環境に合せて実用的な地味な色を選ぶことと、これに反して鮮明で派手な色どりで、衣服と対照的な配色効果をねらうという、両面の理由が考えられる。

## Ⅳ 結 論

以上昭和31年から34年までの4年間にわたって試みた色彩統計の結果をまとめると、ほぼ次のような結論に達した。

まず季節別に分類すれば、夏は白が圧倒的多数であり、冬は黒やグレーが多い。春・秋は有彩色が多く用いられるときであるが、春の方が明るく、秋は渋みがかつた色が使用されている。すなわち季節的影響は明度に強くあらわれていることがわかる。

また年間を通じ多く用いられる色相は、青と橙の系統で、紫系統は最も使用率が低く、緑の系統はその中間である。

衣服の種別についてみると、面積の広い単色の衣服には多く落ち着いた色合いが用いられ、複色の場合は上衣は明るく下衣は暗く、かつ無彩色が圧倒的に多い。上下衣服の配色については、配色のルールに従って、類似と対立の双方の配色が多くあらわれており、不調和範囲に属する場合もみられるが、明彩度との関係もあるので、さほど問題になるとは考えられない。明彩度については下衣の安定感に重点が注がれていることは、着実な着装のあらわれとみられる。

類被服はアクセサリーとしての効果や、他の衣服との配色上の関係から、黒が高率を示しているのは当然である。

4年間の変化の特徴を探ると、始めの31年度は黒や紺などの使用率が高く、衣服全体が低彩度であったが、年々色どり豊かになってきた点が目立っている。また昭和32、33年度は高彩度がかなり進出したが、34年にはずつと落ち着いて低い方に移行している。これは恐らく派手でどぎつい感じの色は永続性のないことを示すものであろう。

従来北海道人の用いる色は他府県に比べ、暗いと評されているが、それは気候的ずれが大きな原因であるように思われる。すなわち冬季間5カ月は冬の衣服を用いるため、他府県で春衣裳の

## 札幌市における婦人服の色彩統計

ときに北海道ではまだ冬姿であり、また他府県ではすでに夏姿の時分に、本道では春の衣服を身につけているというような、季節的ずれが衣服の色彩に大きな影響を与えていることは事実であろう。また気候その他の自然環境のもつ要因も、多分に関係あるものと考えられる。

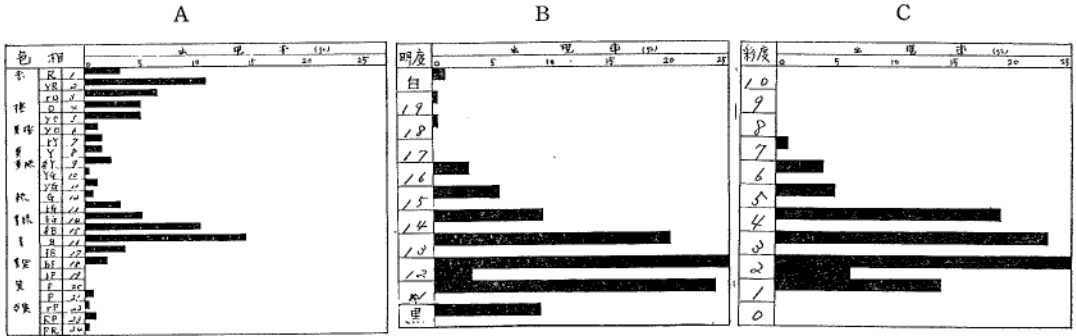
衣服の色彩についての地方的特色や、流行との関係などを明確に把握するためには、長期間にわたる精密な調査が必要であるが、本調査によつても、札幌市における婦人衣服の色彩の一般的傾向を、明らかにすることができた。流行との関係等については今後の研究に俟たなければならない。

### 参 考 文 献

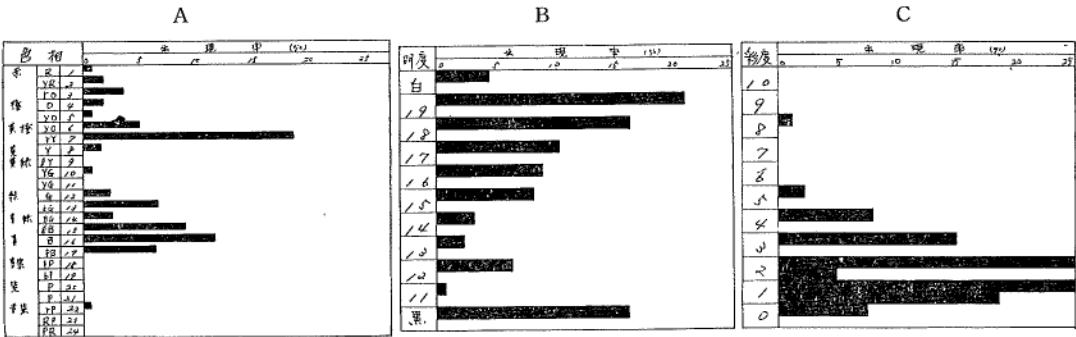
- 1) 日本色彩研究所：色彩研究，1954
- 2) 日本色彩研究所：色の標準，1954
- 3) 和田三造：色名大辞典，1954
- 4) 色彩統計グループの調査報告，1955～1959
- 5) 岡田喜義：基調色と流行色の考え方，1960
- 6) 伊藤花子：札幌市における婦人服の色彩統計（第1報）衣服学会誌第2巻第1号，1958

伊藤花子

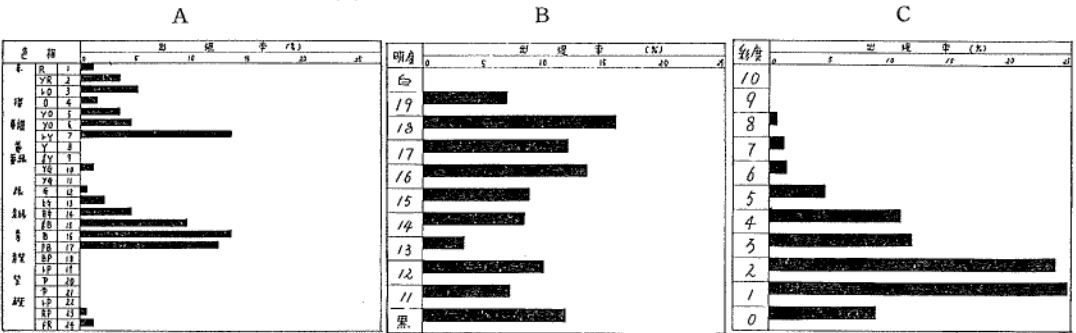
昭和34年 第5図：オーバー 250名



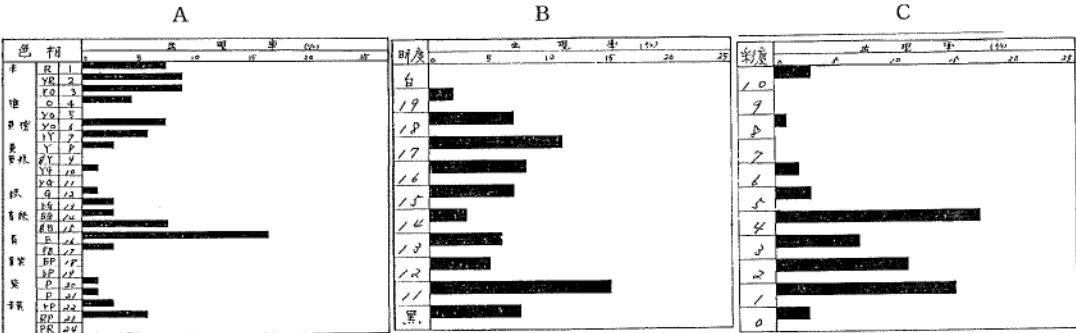
昭和34年 第6図：スプリングコート 125名



昭和33年 第7図：レーンコート 195名

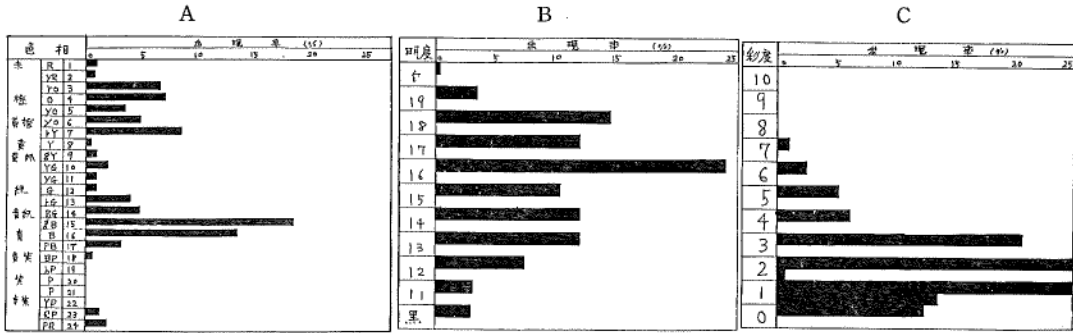


昭和33年 第8図：ワンピース 70名

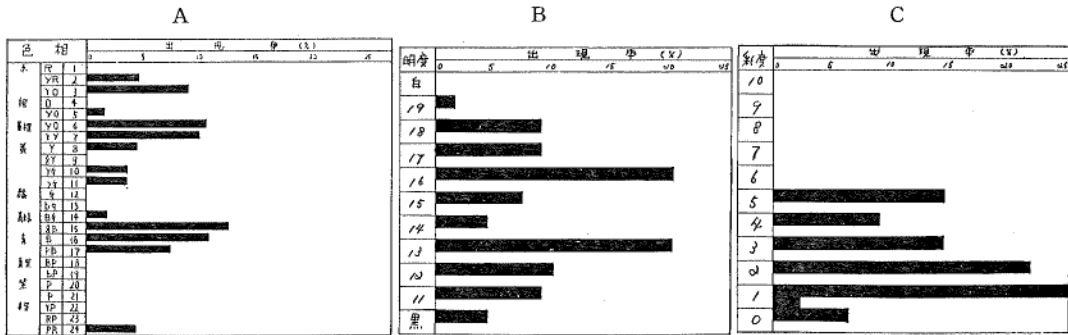


札幌市における婦人服の色彩統計

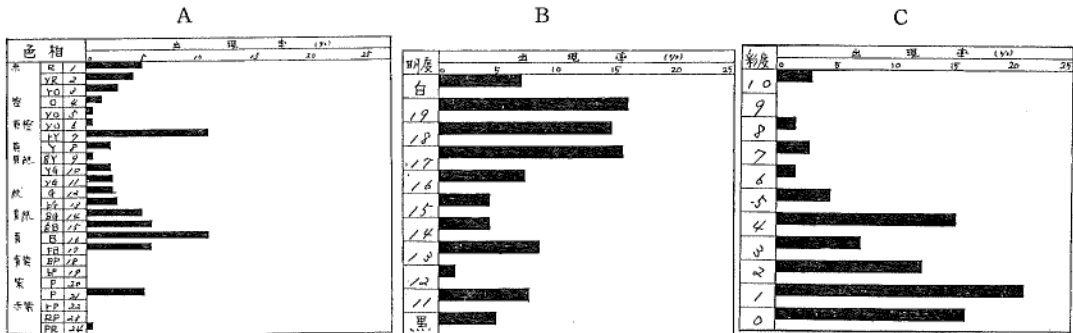
昭和34年 第9図：ツーピース 230名



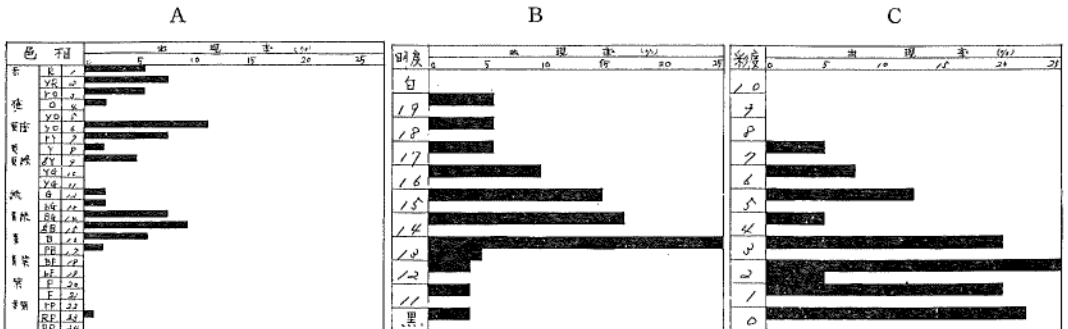
昭和33年度 第10図：秋ジャケット 55名



昭和32年 第11図：秋セーター 140名

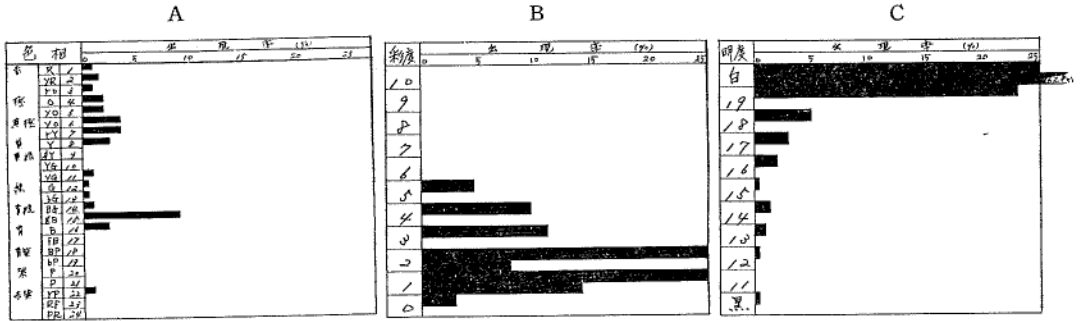


昭和34年 第12図：冬ハーフコート 55名

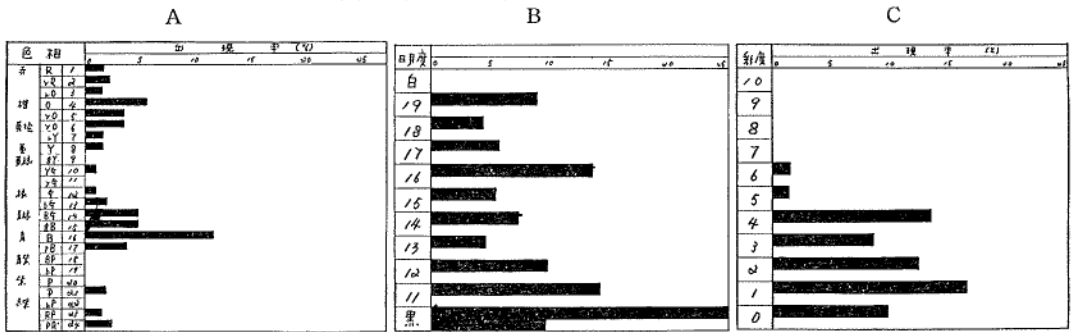


伊藤花子

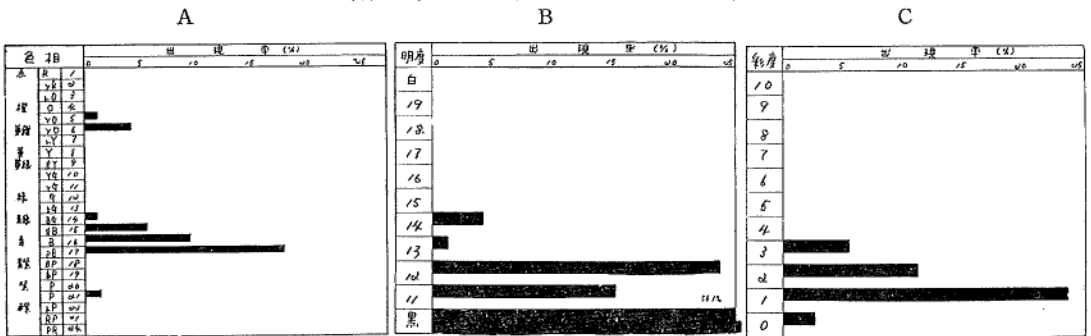
昭和34年 第13図：夏ブラウス 190名



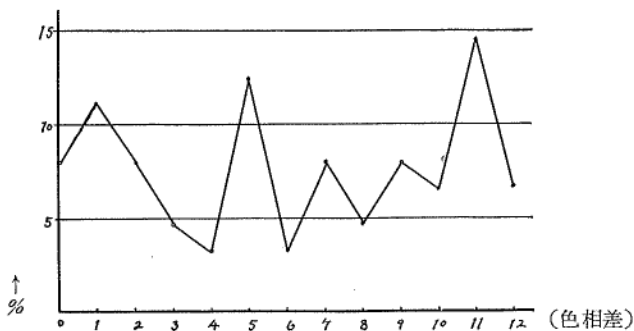
昭和32年 第14図：スカート 233名



昭和32年 第15図：ストラツクス 75名

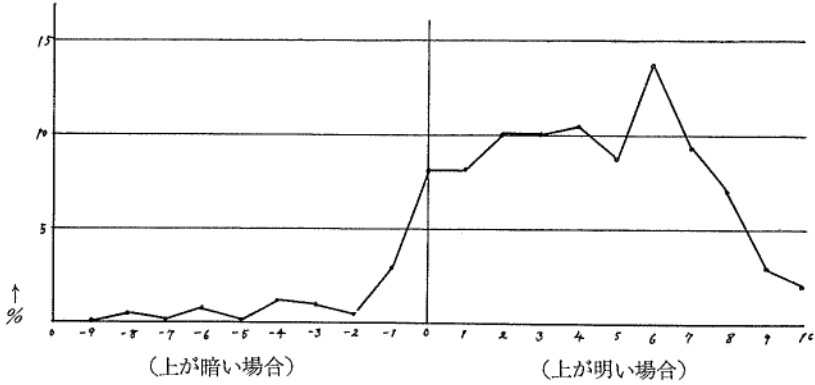


第16図：上下衣服における色相差（春・秋）

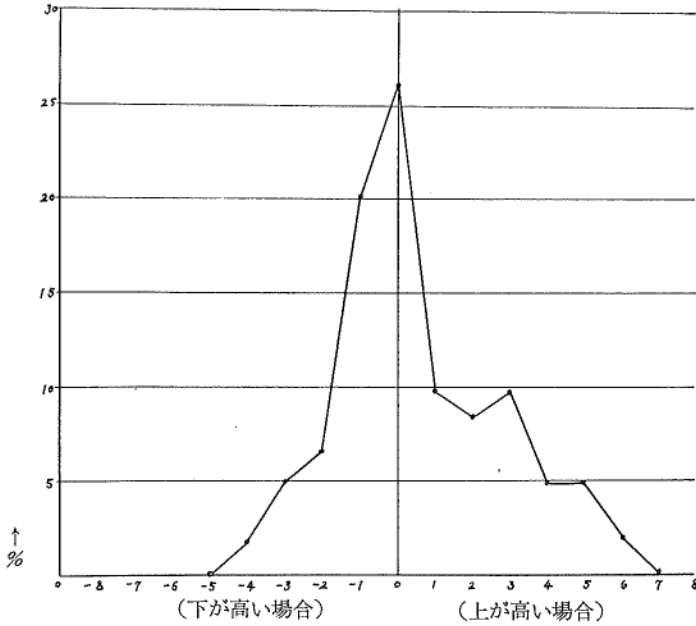


札幌市における婦人服の色彩統計

第17: 図上下衣服における明度差 (春・秋分)



第18図: 上下衣服における彩度差 (春・秋分)



昭和33年 第19図: 冬 靴 130名

